

# 甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

No. 106 June 1994

## コクロケシツブチョッキリとチャイロケシツブチョッキリ

伊 沢 和 義

筆者はコクロケシツブチョッキリ *Auletobius irkutensis japonicus* Voss とチャイロケシツブチョッキリ *A. fumigatus* (ROELOFS) とが同一種であることを飼育により確認したので報告する。

両者はオトシブミ科 (Attelabidae) チョッキリゾウムシ亜科 (Rhynchitinae) ケシツブチョッキリ族 (Auletini) に属する体長 2-3 mm の小型種である。上翅の色彩はその和名が示すように全く異なるが、

形態は極めて良く似ている。分布はかなり限られており、個体数もあまり多くはない。生態は東海地方低山帯での観察によれば、コクロは4月下旬~5月上旬頃に出現し、6月中旬に最盛期を迎え、その後は個体数はかなり減るものの8月上旬頃まで見られる。産卵は5月中旬~7月にかけてヌルデの新芽で観察される。ヌルデの新芽やまだ展開し終えない新葉に穿孔産卵し、その後根元より切り落とす。(写真B) 小さな芽・葉には1卵であるが、複数穿孔産卵することもある。自然状態では、地表に落ちた芽・葉の中で幼虫は成長し、やがて脱出し土中に入り蛹化・羽化するものと思われる。越冬態についてはまだ調査していない。一方チャイロは、7月から現れ8月中旬まで見られるが、全期間を通じて個体数は少なく最盛期がはっきりしない。また産卵行動については筆者はまだ観察していない。8月に入るとヌルデは開花し、新芽・新葉がほとんどなくなり産卵条件が著しく悪化するので果して産卵するかどうか。筆者の経験では、チャイロの産地7ヶ所すべてでコクロを見出している。即ち、チャイロ単独の産地はまだ見つからない。7月中旬~8月上旬にかけては両者が混棲していることがある。コクロの雄とチャイロの雌とが交尾してい

るのを1例だけ目撃した。(1993年8月8日、岐阜県土岐市上郷、標本保管)

原色日本甲虫図鑑 (IV)<sup>1)</sup>、日本産昆虫総目録<sup>2)</sup>いずれも両者を別種として扱っているが、以上の観察から両者は同一種ではないかという疑問が湧いてくる。最近、分類学的見地からも両者を同一種とみなす考えが出されている<sup>3)</sup>。

筆者はこの問題について飼育により確認しようと考え、コクロを捕え産卵させ飼育した。残念ながら条件の不備等によりまだ十分な例数を得ていないが、以下のような結果を得た。

1992年5月15日四季の里(三重県白山町)で採集したコクロがヌルデの新芽に産卵し、老熟幼虫は芽より脱出し土中に入り越冬・越冬し、1993年7月4日チャイロ1♀が羽化した。

1993年6月18日亀ノ口林道(岐阜県土岐市曾木)で採集したコクロがヌルデの新芽に産卵し、幼虫はそのまま芽の中で蛹化し(写真A)、7月27日チャイロ1♂、7月29日チャイロ1♀が羽化した。

両採集地ともこの時点ではコクロのみが棲息しており、

チャイロはまだ出現していない。

いずれの場合もコクロ→チャイロで、コクロ→コクロが得られていないが、コクロとチャイロとが別種ではないことは確認できた。

コクロとチャイロとの関係は以下のように考えることができる。

①個体変異、系統上の変異

チャイロとコクロの出現期間のオーバーラップが少ないこと、チャイロが決って遅く出現することの説明が難しい。





## ②季節型(春型=コクロ, 夏型=チャイロ)

チャイロの出現時間がコクロに比較してかなり短かい(1/3程度)こと、個体数が少ないことの原因が不明である。

## ③成熟度の相違および色変り

色変りするならば、チャイロの出現後期8月中旬頃には黒化する個体がいともよさそうであるが、この時期はチャイロばかりである。またコクロの子がすべてチャイロとすると個体数に著しい差があるのは何故か。但し次の様に考えることはできる。コクロの子は夏の羽化時点ではすべてチャイロである。

## ○鹿児島県大隅半島のナミハンミョウの分布

大隅半島の南部方面は交通の便も悪く、採集記録の少ない地点の一つと言える。芳賀 馨氏(川崎市)は甲虫調査のために訪れた際に、ナミハンミョウ *Cicindela chinensis japonica* THUNBERG を12地点から採集されたので、ハンミョウ類の分布記録として書き留めておく。なお、採集地点はすべて肝属郡(きもつきぐん)に所属する。

1♀, 高山町甫与志岳(ほよしだけ)甫与志林道, 標高450m, 4.V.1991. 林道の環境は、ごく一部に照葉樹林があるものの大部分はスギ林であるという。

2♀♀, 高山町二股川(九州電力高山川支流ダム), 標高370m, 4.V.1991. 貯水背後に堆積した、泥の被った砂の上に見られた。

1♀, 内之浦町大浦川(中流の左岸), 標高280m, 4.V.1993.

1♀, 田代町雄川(九州電力雄川ダムの右岸), 4.V.1993.

1♂, 3♀♀, 根占町舟木, 3.V.1992. アスファルトの道路路上に見られた。

2♀♀, 根占町二川(ふたかわ)二川川(中流の左岸), 30.IV.1993.

1♂, 佐多町木場岳(南面)佐多専用林道, 標高580m, 1.V.1992.

2♀♀, 佐多町大中尾峠(東面)大中尾専用林道, 標高480m, 1.V.1992.

2♂♂, 1♀, 佐多町針山, 2.V.1993.

1♂, 佐多町島泊(しまどまり)島泊川(左岸), 4.V.1992.

1♂, 佐多町大泊, 3.V.1992. アスファルトの道

越冬中(後)に色変りする。一部の新成虫が夏に地上に現れる。

## ④その他

蛹化あるいは羽化の際の温度条件等で色彩が決まり色変りしないという可能性もある。たとえば、夏に蛹化・羽化するものはチャイロとなり、幼虫で越冬または越冬し、秋または春に蛹化・羽化するものがコクロとなる。

③または④の可能性が強いと思われるが、現時点ではより深く議論することはできない。今後蛹化時期・越冬態などを調べる必要がある。飼育状況下ではしばしば蛹化・羽化時期がずれることがあるので、自然状態にできる限り近づけること、十分な例数を確保することが重要であろう。

多くの御教示をいただいた沢田佳久氏に感謝する。

## 参考文献

- 1) 森本 桂, 1984. 林匡夫, 森本桂, 木元新作編著, 原色日本甲虫図鑑(IV): 249.
- 2) 平嶋義宏監修, 1989. 日本産昆虫総目録.
- 3) 沢田佳久, 1993. 私信.

(岐阜県多治見市)

路上に見られた。

1♂, 1♀, 佐多町田尻, 3.V.1993.

採集された21頭には顕著な特徴は見られず、肩部の後紋もはっきりしており、屋久島や種子島で見られるような肩部後紋の縮小ないしは消失した型は含まれてはいない。

標本を恵与された芳賀 馨氏にお礼申し上げる。

(横浜市瀬谷区, 榎戸良裕)

## ○クシヒゲハネカクシ2種の採集状況

クシヒゲハネカクシ属の種は、スズメバチ属の巣等から得られることが知られているが、多くは、広葉樹の樹液に集したものが採集されているという。次の2種は、それとは異なる状況で採集されたので、書き留めておきたい。下記の2例に共通する溪畔という環境は、生活史とどのように関係しているのだろうか。なお、同定にはWATANABE(1990, *Elytra, Tokyo*, 18, pp. 59-72)を参照した。

1. *Velleius pectinatus* SHARP クシヒゲハネカクシ  
1♀, 山梨県道志山塊道志村道坂峠, 標高約1,000m, 19.VIII.1993. 筆者採集。採集状況: 溪畔でナガゴミムシ類を採集中、石起しで得られた。

2. *V. setosus* SHARP コクシヒゲハネカクシ  
1♂, 1♀, 北海道渡島半島七飯町大川, 16.VIII.1993. 筆者採集。採集状況: 溪流の中央に露出した岩の上に、黒いV字状のものが見えたので、近寄ってみると上記の個体が交尾していた。採集の際にすぐ連結をといいたが、このようなV字型の交尾様式は、コメツキムシ科で知られている(林, 1986, 原色日本甲虫図鑑, I, p. 78)が、筆者は初めて観察した。

(神奈川県海老名市, 西川正明)

## ハーヴァード大学比較動物学博物館 (MCZ) の BOWDITCH Collection

鈴木 邦 雄

ハーヴァード大学の比較動物学博物館 (Museum of Comparative Zoology; 以下通称通り MCZ) には、膨大な昆虫類の標本が収蔵されている。primary type だけで4万個体近くあると聞いただけで、分類をやっている者は気が遠くなってしまふ。W. M. WHEELER 以来、E. O. WILSON や B. HÖLLDOBLER, H. E. EVANS, J. CARPENTER など伝統のある膜翅類, F. M. CARPENTER を中心とする脈翅類や毛翅類, H. A. HAGEN Collection で有名な蜻蛉類, LE CONTE と HORN の Collection をはじめ H. C. FALL, P. J. DARLINGTON, J. F. LAWRENCE など多くの研究者を輩出した甲虫類と、主要な群を列挙しただけでそのスケールと充実度が推測されるというものである。ハムシ科についても同様である。MCZ のハムシ科の標本は、25 個の標本箱が収容できるスチールのキャビネット 22 個と、LECONTE & HORN Collection とからなっている。後者のハムシ科の標本は、よく整理された3個のキャビネットの48個の標本箱に収容されている。さらに、このMCZには、いわゆる BOWDITCH Collection (以下 BC) と呼ばれるハムシ科の貴重かつ膨大な標本がある。それは、現在整理が進行中であるが、未整理の分だけで約6個のキャビネットに収蔵されている。久留米大学の木元新作博士も、かつてハワイの Bishop 博物館の故 J. L. GRESSITT 博士と中国と朝鮮のハムシの大著 (GRESSITT, J. L. & S. KIMOTO, 1961 & 1963. The Chrysomelidae (Coleopt.) of China and Korea. Pacific Ins. Monogr., 1A & B) をまとめられた折、この BC を研究されている。この BC は、前世紀後半から今世紀初頭に活躍した Martin JACOBY のコレクション (多数のタイプ標本を含む) を基礎にしており、ハムシ科の分類学的研究を行うには、ロンドンの自然史博物館、パリの自然史博物館、ワシントンのスミソニアン博物館などの収蔵標本と並んで、まずどうしても射程に入れないわけにはいかないものである。

私は、数年来この MCZ の D. G. FURTH 博士との共同研究を行ってきたが、幸いなことに、1993年の2~3月と7~8月の二度、それぞれ1ヶ月半ずつここに滞在して研究する機会を得た。日本学術振興会と米国の NSF が共同で実施している日米科学協力事業の共同研究が採択されたことによる。MCZ には、1988年から89年にかけてイェール大学に留学中、当時イェールにおられた FURTH 博士と三度来ており、基本的な状況は把握していたが、今回の比較的長期間の滞在中に、特にこの BC の状況についてより詳しく知り得たので概要を紹介しておきたい、というも、一部の研究者を除けば、その重要性にもかかわらず、実態があまり知られていないように思われるからである。さらに、ここの標本が、何よりも有為な、特に若い研究者によって詳

しく研究されることが望まれているからでもある。現在、FURTH 博士の努力によって BC の基本的なリスト (後述) が完成している。また、同博士とカリフォルニアのサクラメントにある Department of Food and Agriculture の Terry N. SEENO 氏などの努力によって、世界の主要研究機関に収蔵されているハムシ科の標本のデータベースの作成が着々と進んでいる。それには、個人の収蔵するコレクションも対象とされており、すでにかんりのリストが集積されている。こうしたプロジェクトの背景には、個人の収蔵する標本も含めて、標本というものが、人類の共通の財産であり、学問に寄与すべく可能な限り広く利用されるべきものであるとの考えが前提となっていると思われる。何よりもハムシ科研究者の共通の利用に供することが意図されており、世界のハムシ科研究者のネットワークを作ることによって、相互協力体制を緊密にはかっいてこうとするものである。もちろん、こうした意図は、何もハムシ科に限られたことではなく、すでに他のいくつかの昆虫群でも試みられてきているようである。私は、こうした研究ネットワークが、現実的にはまだごく一部の、しかもかなり恵まれた研究環境に置かれている研究者によってしか十分には利用されていない現実を無視しようとは思わない。そもそも、こうした研究ネットワークが、文字通り国境を越えた全ての研究者に利用されるべく用意されているとは言っても、主体的にそうしたお膳立てをするのできる研究機関なり研究者は、欧米の先進諸国の、しかもごく一部に限られている。そして、そうしたものの存在事実すら知らない研究者の方が多いのが実情であろう。長年の戦争状態のために、昆虫の研究どころではない国が今なお極めて多い。そういう世界にわれわれはいま住んでいるのだ。現実を直視すると言うなら、そういう現実こそがまず踏まえられねばならないだろう。かくいう私自身、非常に幸運に恵まれたおかげで知ることのできた事柄が少なくない。私の場合について言うならば、過去20年間地方大学の教養部で事実上一人で研究を続けてきたので、そうした事情には特に疎くなりがちである (1993年4月に教養部の廃止に伴って理学部に移籍した)。もちろん、どのような状況に置かれていても、自力でそうした世界の情勢を把握することは可能であり、それも研究者個人の研究意欲と努力によるのだと言われればその通りであろう。だが、私が、乏しい経験から常々感じかつ考えてきたことは、ともかく自己の置かれた研究環境の中で可能な限り研究の効率アップをはかりたいということ、またそのための研究者の相互協力はどこまでどのようにして可能かということであった。私の意図や意識は極めて単純なものである。やる以上、できるだけ無駄のないやり方でやりたい、ということに尽きる。

私が FURTH 博士と何度も激しくやり合ってきたことがある。彼にとってはすでに当然のことが、大多数の、特に第三世界の研究者にとっては必ずしも当然ではないことを私は何度も言わねばならなかった。初めに彼の名誉のために言うておくと、私はこれまでに、同僚研究者(これは、もとよりこの言葉のもっとも広い意味においてである)に対して、彼ほど個人的な直接的利害を離れて可能な限りの援助を惜しまない研究者に出会ったことがない。たとえば、過去3度の国際昆虫学会議において、彼は「国際ハムシ科シンポジウム」をオーガナイズしてきたが、そのために彼が費やした時間と労力ははかり知れない。1992年の北京のシンポジウムの際には、東欧や中国の研究者に対して、資金的な援助(種々の方法で調達されたものである)までしているのである。それは、上で述べたような、少し気障に言えば、学問や同僚研究者に対する限りない信頼に基づいていると思う。私が本稿を書いている今も、彼は北京の国際シンポの論文集の編集に一人で携わっており、深夜にまで及ぶことが少なくない。そうしたことを理解した上で、なお私が彼に言わねばならなかったことは、彼のそうした努力自体、彼の研究環境(それはもとより彼が自身の努力によって築きあげてきたものである)が可能としているのだということである。仮に同じような考えや意志を抱いたところで、大多数の研究者にはとうてい実行不可能であろう。私など、日本においてもむしろかなり恵まれた研究環境にいる方であろう。しかし、仮に私に彼と同じだけの能力と意志があったとしても、おそらく私の置かれている状況では、彼の1/3のことも果たせないにちがいない。それでも、私にも1/3程度のことはできるのではないかと思えるだけ恵まれているのだとも言える。私はそうしたことを承知し、しかもプロとノンプロに関わりなく各人が可能な努力をするという前提を踏まえた上で、なおそうした世界的な研究ネットワークの構築をはかるのでなければならぬと考えるのである。そのためになされるべきことは極めて多い。そして、これは言わずもがなのことであるが、私としては個人的にどうしても踏まえておきたいことなので敢えて述べておくと、そうした世界的な研究ネットワークに可能な範囲で寄与することは、長期的に見た時、必ず各研究者にポジティブに還元されてくるものであるということである。つまり、それはとりもなおさず、各研究者自身のために他ならない。そういうコンセンサスを築いてゆくことも、また極めて大切なことだと思われる。こうした考え方を「理想論」というレッテルを貼り付けて嘲笑し、結果的に排斥する思想は貧しく、むしろ現実を直視しないものであるということをおきたい。

ついでながら、ここで特にハムシ科の研究者に向かって、ぜひ指摘しておきたいことがある。ハムシ科研究者相互の情報交換と交流を図るために「Chrysomela」なるニュースレターが1979年より刊行さ

れている。これは、資金面も含めて前述の T. N. SEENO 氏の個人的努力に負うところが極めて大きい。同氏は、オハイオ州立大学のハムシ科(特にヒゲナガハムシ亜科)の大家 J. A. WILCOX 博士と1982年に「Leaf Beetle Genera」(Entomography 1: 1-221)をまとめられたが、これは膨大な数のタクサ(約20亜科2,000属35,000種)を擁するハムシ科研究者にその全体像と研究指針を与えるという点で測り知れない貢献をしてきていると思う。ここにも、各研究者の努力や成果を、志を同じくする者の共通の財産としていこうという強い意図があると思う。こういう点については、われわれは特にアメリカの研究者に学ぶべきことが多いように思う。別の機会に詳しく触れたいと思っているが、たとえば研究を効率よく進めるための具体的手段の一つとしてさまざまな Reference Books の活用があることは言うまでもない。特に、若い研究者は、できるだけ早い機会にそうした Reference Books の存在を知り、その利用方法に習熟すべきである。日本でもその種の書物がそれなりに出されている。しかし、日本などは比較にならないくらい研究環境が整備されている欧米の先進諸国ほど、むしろその種の Reference Books の出版が盛んであることは、極めて示唆に富んでいると思う。真に充実した内容の Reference Books を作成するには、それだけの基盤が整っていなければならない。たとえば、分類研究者にとって不可欠の「Zoological Records」を考えて見れば良い。それを日本で刊行することは可能であろうか?あるいは、「Entomology Abstracts」はどうであろうか?現状では、思いも及ばない。世界的な研究ネットワークの構築に向けて、私たちが踏まえねばならないというのは、こうした現状である。もちろん分野によるであろう。日本が世界の最先端を行っている分野であれば、そのためのリーダーシップを日本の研究者や機関が果たすことも可能であろう。しかし、私たちの分野ではとうてい不可能であろうと思う。もしも必要な経費のいっさいを国家が出すという前提で考えたとしても、それが可能となるには数十年はかかるのではないだろうか。その種の Reference Books を作成するのに必要な全ての情報を世界中から集積するための体制を築く、というまず第一に必要な前提条件一つを考えただけでも途方に暮れてしまう。日本が世界の最先端を行っているいくつかの分野ならいざ知らず、その他の分野では、それほど大きく状況が異なるとも思われない。これが、現状であるということをはっきり認識すべきである。どんなに取り繕っても取り繕いようがない。これは、GNPがどうか、世界のどこよりもコンピュータ・サイエンスが進歩しているとかいう地味とは、そもそも時間尺度からして異なる問題である。これまで蓄積されてきたもの、その総体の差があまりに大きく決定的なのである。そして、私は、この小文を、ここで私の述べるようなことは百も承知であるというよう

な人々に向かって書いているのではないので、その点誤解のないように願いたい。私は、私の状況を判断基準としているにすぎない。

さて、BCのことに話を戻す。BCは、確かに素晴らしいものである。だが、世界のハムシ科研究者の共同利用という観点から見た場合に、まったく問題がないわけではない。私の目から見て、問題と思うのは次のような点である。まず、標本自体が極めて古いということ。標本の状態は、一般的にそれほど悪くないので、一般的な分類学的研究にはさほど支障はないが、データ・ラベルの不備なものが極めて多く、中にはまったくラベルの付いていない標本もある。同定はかなり確かであるが、かなり古い体系に基づいているので、注意が必要である。さらに、ごく最近になって気づかれたことであるが、BCには、MS name、つまり正式に公表されていない名称の標本も含まれている。そのような種の標本の取り扱い、特に慎重になされる必要がある。BCの標本は、25個の標本箱が入るスチールのキャビネット6個に収められているが、各標本箱には隙間なくギッシリと収蔵されており、うかつに動かすことができない。近年特にアメリカやカナダ、そして日本でも普及しつつあるユニット・ボックスに種ごとに整理する計画が進行中であるが、そのためには現在の3倍以上の収蔵スペースが必要となり、当然かなりの経費も必要になるわけである。現在の作業は、基本的に原状を変えないという方針で、取敢えずそのままユニット・ボックスに移すことが行われているが、作業は必ずしも進捗しておらず、現状では当該群の研究者自身が直接来館しないかぎり、研究用に借り出すことはあまり容易ではない。ただし、Florida A & M 大学の Ingolf ASKEBOLD 博士の努力で、ネクイハムシ亜科の整理は基本的にほぼ終わっている。私も、1993年2~3月の滞在中にムカシホソハムシ亜科 Aulacoscelinae についてはほぼ整理を行った(と言っても、この群は後述のように2属計18種からなる小群であり、1個の標本箱に全て収納できた)。さらに、同年7~8月に再度滞在中の折、カタビロハムシ亜科 Megalopodinae についてもほぼ整理をすることができた(これら2亜科の概要については後述する)。また、BCに含まれているタイプ標本は、全てすでにコンピュータに登録されており、標本の基本的な状態や付されているラベルの内容などもただちに検索できるようになっている。ただし、それらも、後で触れるように、ロンドンの自然史博物館などと分散保管されているものが多いので、極めて慎重な取り扱いが必要である。なお、BCには、トゲハムシとカメノコハムシの2亜科はほとんど含まれていない。それなりの理由と経緯があると思うが、私には把握しきれなかった。また、本来BCに含まれていた標本が、他の研究機関に移管されているものや、一般的な参照標本に移されているものもあるので、この点も注意する必要がある。これも、目録に従って標本を調べてみて初め

て判明したことである。

2 BCのムカシホソハムシ亜科とカタビロハムシ亜科の標本

ここで、私がある程度研究し得たハムシ科の2亜科の概要を紹介しておく。これらの群は系統分類上きわめて重要であるにもかかわらず、ほとんどの研究機関で標本数が限られている。それゆえ、ハムシ科の研究者にとっては、それ自体が有益な情報であると信ずるが、BCのような古いコレクションがいかに重要な標本を多数含んでいるかを示す実例として他の群の分類研究者にも参考になるであろう。

#### (1) BCのムカシホソハムシ亜科の標本

この亜科は、中南米にのみ分布する特異な小群である。最近、私はこの群の系統的位置に関する小論をまとめたところである [SUZUKI, K., 1994. The systematic position of the subfamily Aulacoscelinae (Coleoptera: Chrysomelidae). In FURTH, D. G. ed. Proceedings of the 3rd International Symposium on Chrysomelidae, Beijing, 1992. Universal Books]. この亜科の系統分類上の位置などについては、いずれ別稿で論じたい考えであるが、ここでは全種のリストを挙げておく。種名の後の\*印は、タイプ存在を示す。1954年にF. MONRÓS [この研究者については、中條道夫先生が簡単に紹介されたことがある:「日本のハムシ(1): ツヤハムシ亜科」, 昆虫学評論, 9: 51-58, Pls. 9-10; 私も短い記事を書いたことがある:「フランススコ・モンロスとの出逢い」, 富山大学学報, (312): 15-16, 1989] が分類学的再検討をして以来、1975年にL. N. MEDVEDEV が3新種1亜種を記載しただけで、この群についてのわれわれの情報ほとんど増えていなかった。詳しくは、SUZUKI (1994) を見ていただきたい。この群は、日本のファウナには直接関係はないが、ハムシ科の上級分類群の系統分類体系を考える際には極めて重要であり、そのことも考慮に入れて属以下の分類群にも和名を付すことを試みた。いちいちその命名の理由について詳しく述べないが、多少ともこの群に対するわれわれのイメージアップにつながればとの考えからである。ただし、残念ながらMEDVEDEV が1975年に記載した3種については、標本を直接見ておらず、記載文からの判断で付けた。BCには、JACOBYのタイプのうち*Janbechynea (Janbechynea) elongata*を除く9種のタイプが含まれている。JACOBYのタイプは、ロンドンの自然史博物館に同シリーズの標本があり、将来の研究者によってlectotype 後模式標本の指定が必要になる。私は、そうした措置をすることを敢えて差し控えた。

1. Genus *Aulacoscelis* DUPONCHEL et CHEVROLAT, 1843 (ムカシホソハムシ属)
  1. *A. candezei* CHAPUIS, 1874  
(カンディーゼムカシホソハムシ)  
[syn. *A. purpurea* HORN, 1892]
  2. *A. confusa* MONRÓS, 1954

- (アカムカシホソハムシ)
3. *A. costaricensis* BECHYNÉ, 1950  
(コスタリカムカシホソハムシ)
  4. *A. gigantea* MEDVEDEV, 1977\*  
(ムネズジムカシホソハムシ)
  5. *A. grandis* JACOBY, 1888\*  
(ベニボタルモドキムカシホソハムシ)
  6. *A. hogeï* JACOBY, 1888\*  
(ホージュムカシホソハムシ)
  7. *A. melanocephala* JACOBY, 1877\*  
(クロムネムカシホソハムシ)
  8. *A. melanocera* DUPONCHEL et CHEVROLAT, 1843 (ムカシホソハムシ)
  9. *A. puncticollis* MEDVEDEV, 1975  
(ヒメムカシホソハムシ)
  10. *A. sanguinea* JACOBY, 1888\*  
(サメハダムカシホソハムシ)
  11. *A. tibialis* JACOBY, 1888\*  
(オオキイロムカシホソハムシ)
  12. *A. tuberculata* MEDVEDEV, 1888\*  
(カタコブムカシホソハムシ)
  13. *A. variabilis variabilis* JACOBY, 1975  
(カワリムカシホソハムシ: 原名亜種)  
*A. variabilis pueblensis* MEDVEDEV, 1975  
(カワリムカシホソハムシ: プエプロ亜種)
- II. Genus *Janbechynea* MONRÓS, 1953 (ミナミムカシホソハムシ属)
- Subgenus *Bothroscolis* MONRÓS, 1954 (ミゾアシミナミムカシホソハムシ亜属)
14. *J. (B.) fulvipes* (JACOBY, 1888)\*  
(キイロミゾアシミナミムカシホソハムシ)  
[syn. *J. (B.) femorata* (JACOBY, 1888)\*]  
[syn. *J. (B.) ventralis* (SCHAEFFER, 1993)]
  15. *J. (B.) melyroides* (CROWSON, 1946)  
(ミゾアシミナミムカシホソハムシ)
- Subgenus *Janbechynea* MONRÓS, 1953 (ミナミムカシホソハムシ亜属)
16. *J. (J.) elongata* (JACOBY, 1888)  
(キイロミナミムカシホソハムシ)
  17. *J. (J.) inverosimilis* MONRÓS, 1954  
(アオバネミナミムカシホソハムシ)
  18. *J. (J.) paradoxa* MONRÓS, 1953.  
(ヒメアオバネミナミムカシホソハムシ)

## (2) BCのカタバヒロハムシ亜科の標本

この亜科は、日本にはカタビロハムシ *Colobaspis japonicus* (BALY, 1874) のみが産する。特に中南米やアフリカなどに多くの属や種が分布している。BCには、JACOBYのCollectionに含まれていたかなりの属と種が収蔵されており圧巻である。私は、H. CLAVAREAU (1913)の古いカタログ(Coleopterorum Catalogus, Pars 53, Chrysomelidae: 5. Megascelinae, 6. Megalopodinae, 7. Clytrinae, 8. Cryptocephalinae, 9. Chlamydiae, 10. Lamprosominae. 278 pp.)に基づいてこのBCを整理した。

それ以後まとまったカタログは出されていない。中南米産のものについてはF. MONRÓSの、またアフリカ産のものについてはM. PICの研究があるが、残念ながらBCにも存在しないものがある。以下は各属について、CLAVAREAUのカタログに載っている種数(分母)とBCに収蔵されている種数(分子)とを参考までに示した。また、各属毎に、BCに収蔵されている種のリストを挙げておいた。種名の後の\*印は、タイプが存在を示す。

1. Genus *Masthosthetus* LACORDAIRE, 1845 (76/121) (中南米)  
*abbreviatus* (KLUG, 1834); *abdominalis* (KLUG, 1824); *alternans* (KLUG, 1834); *angustovittatus* JACOBY, 1892\*; *atrofasciatus* (BLANCHARD, 1843); *aulicus* LACORDAIRE, 1845; *batesi* BALY, 1859; *bicolor* (KLUG, 1824); *binotatus* (KLUG, 1824); *bipunctatus* (KLUG, 1824); *bolivianus* JACOBY, 1904; *cardinalis* (KLUG, 1834); *championi* JACOBY, 1880; *chontalensis* JACOBY, 1880; *cordovensis* JACOBY, 1888\*; *curvatus* (FABRICIUS, 1801); *dentatus* (KLUG, 1824); *diadema* (KLUG, 1834); *dimidiatus* (KLUG, 1824); *distinctus* LACORDAIRE, 1845; *duplocinctus* CLARK, 1866; *ephippiger* (MANNERHEIM, 1826); *facialis* BATES, 1866; *femoratus* JACOBY, 1888\*; *ferrugineus* (OLIVIER, 1790); *fraternus* BALY, 1876; *frontalis* (KLUG, 1824); *gracilentus* JACOBY, 1888\*; *hieroglyphicus* (KLUG, 1834); *histrion* LACORDAIRE, 1845; *humeronotatus* JACOBY, 1888\*; *imitans* JACOBY, 1888\*; *inornatus* BATES, 1866; *javeti* BALY, 1859; *jeheli* BALY, 1859; *lateritius* (KLUG, 1834); *leprieuri* LACORDAIRE, 1845; *maculicollis* LACORDAIRE, 1845; *modestus* JACOBY, 1880; *multipunctatus* LACORDAIRE, 1845; *nigricollis* JACOBY, 1904; *nigrocinctus* (CHEVROLAT, 1832); *nigrofasciatus* JACOBY, 1880; *novemmaculatus* (KLUG, 1834); *obliquus* (FABRICIUS, 1801); *octomaculatus* JACOBY, 1888; *panamensis* JACOBY, 1888\*; *pantherinus* LACORDAIRE, 1845; *pascoei* BALY, 1859; *peruensis* JACOBY, 1903; *phaleratus* (KLUG, 1834); *philemon* BALY, 1863; *pictus* BALY, 1876; *plato* BATES, 1866; *quadrinotatus* ERICHSON, 1847; *quadripunctatus* (KLUG, 1834); *quinquemaculatus* LACORDAIRE, 1845; *rogersi* JACOBY, 1880; *rubricollis* (CHEVROLAT, 1834); *rufipennis* (MANNERHEIM, 1826); *salvini* JACOBY, 1878; *sanguineus* LACORDAIRE, 1845; *sexguttatus* LACORDAIRE, 1845; *sexplagiatus* LACORDAIRE, 1845; *sobrinus* LACORDAIRE, 1845; *stali* BALY, 1861; *suavis* BATES, 1866; *thoracicus* BALY, 1859; *tibialis* (FABRICIUS, 1801); *transversalis* LACORDAIRE, 1845; *tricinctus* LACORDAIRE, 1845; *variegatus* (KLUG, 1824); *verticalis* (KLUG, 1834);

*vicinus* LACORDAIRE, 1845; *vittatus* (KLUG, 1824); *zonatus* (KLUG, 1834)

2. Genus *Agathomerus* LACORDAIRE, 1845 (22/36) (中南米)

*atripennis* JACOBY, 1880\*; *azureipennis* LACORDAIRE, 1845; *batesi* BALY, 1859; *bifasciatus* (KLUG, 1824); *bivittatus* LACORDAIRE, 1845; *discoideus* (KLUG, 1824); *dubiosus* JACOBY, 1876\*; *elegans* (KLUG, 1834); *fasciatus* (DALMAN, 1823); *flavomaculatus* (KLUG, 1824); *humeralis* (SERVILLE, 1825); *marginatus* (KLUG, 1824); *nobilis* (KLUG, 1834); *pictus* LACORDAIRE, 1845; *rubrinotatus* CLARK, 1866; *rufus* (KLUG, 1834); *sallei* BALY, 1859; *sellatus* (GERMER, 1823); *signatus* (KLUG, 1824); *subfasciatus* (GERMER, 1823); *succinctus* (KLUG, 1834); *testaceus* (KLUG, 1824)

3. Genus *Megalopus* FABRICIUS, 1801 (18/33) (中南米)

*analisis* KLUG, 1824; *angustatus* LACORDAIRE, 1845; *armatus* LACORDAIRE, 1845; *basalis* JACOBY, 1892\*; *buckleyi* JACOBY, 1889\*; *crinalis* KLUG, 1824; *dentipes* BATES, 1866; *elongatus* BALY, 1876; *inscriptus* KLUG, 1824; *jacobyi* BRUCH, 1908; *nigricornis* FABRICIUS, 1801; *parallelus* LACORDAIRE, 1845; *pilipes* LACORDAIRE, 1845; *poecilosomus* LACORDAIRE, 1845; *sericatus* LACORDAIRE, 1845; *sexvittatus* BATES, 1866; *thoracicus* JACOBY, 1903; *waterhousei* BALY, 1859

4. Genus *Bartocaria* JACOBY, 1866 (0/1) (アフリカ)

5. Genus *Homalopterus* PERTY, 1832 (2/2) (南米)

*heteroproctus* LACORDAIRE, 1845; *tristis* PERTY, 1832

6. Genus *Piomelopus* JACOBY et CLAVAREAU, 1905 (0/1) (マダガスカル)

7. Genus *Colobaspis* FAIRMAIRE, 1894 (8/26) (アフリカ, マダガスカル, アジア, 東インド諸島)

*centromaculata* (JACOBY, 1894)\*; *humeralis* (JACOBY, 1890)\*; *insignis* (BALY, 1859); *japonicus* (BALY, 1873); *lacordairei* (WESTWOOD, 1864); *septemmaculata* (HOPE, 1831); *speciosa* (BALY, 1859); *variabilis* (WESTWOOD, 1864)

8. Genus *Antonaria* JACOBY, 1905 (4/9) (アフリカ)

*femorata* CLAVAREAU, 1905; *modesta* (JACOBY, 1894); *murina* (WESTWOOD, 1864); *varicolor* (JACOBY, 1894)

9. Genus *Sphondylia* WEISE, 1902 (6/15) (アフリカ)

*afra* (KLUG, 1824); *balyana* (WESTWOOD, 1864); *mutillaria* (CLARK, 1866); *thoreyi* (BALY, 1864); *to mentosa* LACORDAIRE, 1845; *ventralis* WEISE, 1902

10. Genus *Poecilomorpha* HOPE, 1840 (4/12) (旧

世界)

*atripes* LACORDAIRE, 1845; *aureovillosa* JACOBY, 1894\*; *calabarica* WESTWOOD, 1864; *passerini* HOPE, 1840

11. Genus *Leucestea* STÅL, 1855 (4/19) (アフリカ)

*antica* WESTWOOD, 1864; *concolor* WESTWOOD, 1864; *rubidipennis* WESTWOOD, 1864; *senegalensis* (LACORDAIRE, 1845)

12. Genus *Kuilua* JACOBY, 1894 (1/2) (アフリカ)

*africana* JACOBY, 1894\*

13. Genus *Clytraxeloma* KRAATZ, 1879 (1/1) (アフリカ)

*cyanipennis* KRAATZ, 1879

14. Genus *Temnaspis* LACORDAIRE, 1845 (13/21)

(アフリカ, マダガスカル, アジア, 東インド諸島)

*amabilis* BALY, 1878; *bengalensis* WESTWOOD, 1864; *bipartita* LACORDAIRE, 1845; *clavareau* JACOBY, 1908; *cumingi* WESTWOOD, 1864; *dohrni* JACOBY, 1899; *downesi* BALY, 1859; *fervida* LACORDAIRE, 1845; *flavicornis* JACOBY, 1892; *mouhoti* BALY, 1864; *nigripennis* JACOBY, 1889\*; *rubens* (KLUG, 1834); *westwoodi* BALY, 1865?

*Temnaspis chrysopyga* WESTWOOD, 1864

なお, JACOBY のタイプは, 各所に分散しており, ムカシホソハムシ亜科の場合と同様, 特にロンドンの自然史博物館に同シリーズの標本があることが多いので, 注意が必要である. いずれ, 将来の研究者によって, 多くの種について後模式標本の指定が必要になろう.

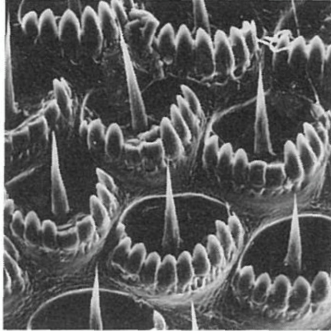
日本産のカタビロハムシは, 最近 *Colobaspis* 属に移されたので, ここでもその処置に従ってある. 他に属の所属の不明なものが2種あり, うち *Temnaspis* に所属するとして記載された *crysopyga* WESTWOOD, 1864 は収蔵されている. したがって, それを含め, BC には301種のうち, 半数以上の計160種が収蔵されていることになる.

この亜科には, 以上の他, これまでに次の属が記載されている: *Plesioagathomerus* MONRÓS, 1945 (南米); *Pseudomegalopus* PIC, 1916 (南米); *Bothromegalopus* MONRÓS, 1947 (南米); *Pseudohomalopterus* PIC, 1920 (南米); *Macroantonaria* PIC, 1951 (アフリカ); *Bryantonaria* PIC, 1951 (アフリカ, アジア); *Macrolopha* WEISE, 1902 (アフリカ); *Falsocolobaspis* PIC, 1942 (アフリカ); *Mimocolobaspis* PIC, 1951 (アフリカ); *Nickimerus* GUÉRIN, 1948 (南米). PIC の設立した属が多い事から, これらのうちのかなりがスプリッティングによるものではないかという予想をする人も多いであろう. そうした分類学的取り扱いも含めて, 将来の研究に待たねばならない. また, *Ateledera* LACORDAIRE, 1845 (南米) については, 本亜科のメンバーとして扱われることが多い. (1993年8月ハーヴァード大学比較動物学博物館にて; 富山大学理学部生物学教室)

## ○ムネスジダンダラコメツキ属の奇妙な点刻

ムネスジダンダラコメツキ属の前胸背板の後方部には顕著な横位の隆起線があって、その後方は強く傾斜する。この隆起線の部分に図示したような点刻が生じていることは知られていない。

前胸背板の他の部分では正常な円形点刻であるが、この部分には帯状に後半部が鋸歯状をした点刻を生じ、中央部に生ずる毛も太短い。このような奇妙な形態をした点刻は、隆起線を生じたときの単純な変異と思われるが、ここを他の物にこすりつけて



傷ついたり、切断したりすることがあるのかは全く不明である。なお、この属の前胸背板後角部の側縁も鋸歯状を生じているが、これとの関連も不明である。図はガロアムネスジダンダラコメツキ (*Harminius galoisi*) の点刻を示す。

(愛知県岡崎市, 大平仁夫)

## ○アカウキクサゾウムシの新産地

アカウキクサゾウムシ *Stenopelmus rufinusus* GYLLENHAL は1987年7月に茨城県牛久沼で採集された記録があるが、その後の記録はなかった。筆者は横浜市南部に位置する円海山地域内で、極めて局地的ではあるが本種が多産していることを知ったので報告する。

1頭, 横浜市栄区上郷町, 21. V. 1992, 久保浩一; 15頭, 同所, 12. V. 1993, 久保浩一; 19頭, 同所, 13. V. 1993, 渡 弘; 43頭, 同所, 20. V. 1993, 堀川正美。

発生地はオオアカウキクサ *Azolla japonica* FRANCH. et SAVAT. の生育地に限られており、その葉の上をゆっくりと歩行中のものや、交尾中のものが観察できた。しかし、体長が2mm前後と小さい



上に形や色が葉上のごみと紛らわしく、さらに、葉裏に潜んでいるものが多いので、ルッキングでの発見は容易ではない。採集には、オオアカウキクサを指で摘んで掌上で軽く揉むのが良く、こうすれば、葉裏に潜んでいたものも発見できる。時期は5月中旬がよい。下旬になると、暖かい日には、見つけた虫がすぐに飛び去るようになったので、この時期に分散するのであろう。前述の如く、日本での最初の記録は7月であるが、横浜の発生地では、6月中旬以降は全く見られなくなった。

本種はアメリカ南部の原産で、前世紀末にフランスに入りイギリス、オランダ、ベルギーにも拡がっているとのことである。日本にはどのようにして侵入したかは不明であるが、分布状態が明らかになれば手掛かりが得られるかも知れない。

末筆ながら、同定していただき、また文献ならびに本種についての詳細な情報をお教え載いた森本桂博士、宮川澄昭氏に厚く御礼申し上げる。また、同定に仲介の労をとられ、採集にも協力していただいた堀川正美氏、発生状況の観察および採集に協力していただいた久保浩一の両氏に深謝する。

## 引用文献

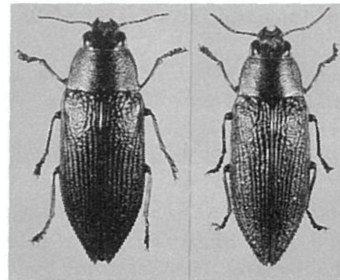
森本 桂, 1988. 日本へ侵入したゾウムシ類の見分け方と被害. 農業研究, 35(1): 28-44.

(横浜市港南区, 渡 弘)

## ○ツマベニタマムシの寄主が判明

ツマベニタマムシ *Tamamushia virida* MIWA et CHŪJŌ は、小笠原諸島に分布するなかなか得難く美しいタマムシであるが、材から成虫が羽化した例はほとんど聞かない。筆者は2年間、小笠原に赴任した際、カミキリムシの調査のために材を調べていたところ、偶然にも本種の寄主が判明したのでここに報告しておく。

本種の寄主については、原色日本甲虫図鑑(III)では、アデクにつき、モモタマナの花にくる、となっているが、アデクが幼虫の寄主を指しているのか成虫が誘引されるということか不明であり、筆者の観察及び調査ではアデクは寄主ではなく、またモモタマナへの訪花も見られなかった。楕円形の脱出孔があるので筆者は、コバネカミキリの食害している材だと思い、立枯れた部分を切ったところ、カミキリムシのものとは異なり木目と無関係で不定形の幼虫



ツマベニタマムシ, 左♀, 右♂





被害されているシマシャリンバイの断面

の食痕があった。その材を宿舎に持ち帰り、保管調査中にツマベニタマムシが1頭羽化した。

小笠原諸島には固有の植物が多く、この寄主となる樹を島内在住の植物の専門家である安井・延島両氏に属し、西南日本、琉球、朝鮮などに分布する植物で、小笠原諸島では丘陵部の尾根など乾燥した低い林(乾性低木林)を構成する樹種で普通に見かけられる。しかし、母島では前述の脱出孔がシマシャリンバイに普通に見られるのに対し、父島ではほとんど見られず、かなり人跡未踏な奥地でわずかに確認された。また、未記録地である鴛島(父島より北へ70 km)でもシマシャリンバイに本種のものと思われる新しい脱出孔が普通にあり分布している可能性が高い。父島は一般的に昆虫の密度が低いのではないかとされているが、奇しくも本種の脱出孔の密度と比例しており、人為的錯乱が少なからず小笠原の自然に影響を与えているように思われる。具体的な記録は次のとおりである。

- 東京都小笠原村母島元地: 15. V. 1992, シマシャリンバイ材 採集; 10. VI. 1992, ツマベニタマムシ1♀羽化; 4. VII. 1992, 同, 1♂羽化。  
 東京都小笠原村母島中ノ平: 27. III. 1993, シマシャリンバイ材 採集; 20. VI. 1993, ツマベニタマムシ1♂羽化; 28. VI. 1993, 同, 1♀羽化; 21. VII. 1993, 同, 1♀羽化; 24. VII. 1993, 同, 1♂羽化; 29. VII. 1993, 同, 1♀羽化。  
 東京都小笠原村鴛島: 24. III. 1993, シマシャリンバ



シマシャリンバイにおける脱出孔

イに本種と思われる新しい脱出孔を多数発見。

未筆ながら本種の寄主を同定していただいた安井隆弥・延島冬生両氏および発表を助めていただいた服部宇春氏に御礼申し上げる。

参考文献

黒沢良彦, 1985. 原色日本甲虫図鑑(III), pp. 2-37, pls. 1-7. 保育社.

(横浜市緑区, 川下 貴)

○小笠原諸島に新たに侵入したカミキリムシ2種

小笠原諸島母島で筆者の一人, 江崎が1991年3月5~18日に採取した材より, 小笠原諸島未記録と思われるカミキリムシ2種を羽化脱出させているのでここに報告する。また, 2種ともに本土からの移入種と考えられるので, その経緯について, 若干の考察を加えた。

1. サビカミキリ *Arhopalus coreanus* (SHARP)

40頭, 評議平, 5. V~2. VI. 1991. リュウキュウマツの枯幹より脱出。

江崎(1992)でツシムナクボカミキリの追加記録とした種が, その後の同定の結果, サビカミキリと判明したので, ここに改めて訂正する。

遠田(1978)によれば, 母島では1974年頃からマツノザイセンチュウ病による夏期の急激枯損が発生し, 調査を行った1977年2月の時点での島内の枯損は, 沖村から評議平, 中の平に集中していた。また, この調査時にはサビカミキリの生息は確認されなかった。このカミキリムシの食害痕は特徴があるので, 松くい虫の研究者として業績のある遠田が見落としたとは考えにくい。このことからサビカミキリが母島に侵入したのは, 1977年以降だと推定される。伊豆諸島では神津島にのみサビカミキリの分布が確認されており, マツノザイセンチュウが1972年にクロマツより発見されている(遠田, 1978)。このことはサビカミキリがマツノザイセンチュウ病の被害丸太により, 分布を拡大していることを示唆している。

小笠原諸島でマツ類のみを加害するカミキリムシは, ツシムナクボサビカミキリ, サビカミキリ, アカハナカミキリ, マツノマダラカミキリの4種になった。これらの種は, 本来マツ類の分布していなかった小笠原諸島へ1899年に沖縄よりリュウキュウマツが移入され(清水, 1985), 定着したことは明らかである。そしてツシムナクボサビカミキリとアカハナカミキリは父島にのみ, サビカミキリは母島にのみ, マツノマダラカミキリは父・母島に分布している。また, この4種の最初に記録されたデータはツシムナクボサビカミキリが1972年8月13日(KUSAMA, NARA, KUSUI, 1973), アカハナカミキリが1982年6月5日(横原, 1983), マツノマダラカミキリは父島の清瀬で1935年7月18日(横原, 1988)で, 今回訂正報告するサビカミキリが1991年であり, かなり年月に差がある。さらにマツノマダラカミキリによるマツノザイセンチュウ病の発生は父島では1979年からで(清水,

1985), 母島の発生よりもかなり遅い, これらのことを考え併せると小笠原諸島へは, 本土から色々なルートでマツ類を使った坑木, 建築材などが入り, これらのカミキリムシはそれと共に侵入して, 今日の小笠原諸島への分布拡大に到っていると推定される。

## 2. セミスジコブヒゲカミキリ *Rhodopina lewisii* (BATES)

1♀, 石門山登山道入り口付近, V. 1992, 樹種不明の倒木より脱出。

セミスジコブヒゲカミキリの種群は, いずれも異所的に分布しており, 種間での形態的な差異は明瞭である。1 頭ではあるが, 他種との形態的な比較の結果, 明らかに本土のセミスジコブヒゲカミキリであることを確認した。この種はかなり多くの樹種を加害し, アカマツへの加害の報告も多い (小島・中村, 1986) ことから, サビカミキリと同様に, マツ類の坑木や建築材と共に本土から侵入したと考えられた。この加害材が採取された地点は, マツ類の建築材等が集積されている集落付近の地点とは離れているが, さらにトンネル工事や道路の補修材などに使われた材によって母島の各所に侵入した可能性が高い。

### 引用文献

- 遠田暢男, 1978. 小笠原諸島におけるマツ枯損の実態調査. 森林防疫, 27: 79-81.  
江崎功二郎, 1992. 小笠原諸島母島におけるカミキリムシの羽化記録と host. げんせい, (59/60): 13-14.  
小島圭三, 中村慎吾, 1986. 日本産カミキリムシ食樹総目録. 336 pp. 比婆科学教育振興会.  
KUSAMA, K., H. NARA, Y. KUSUI, 1973. Notes on longicorn-beetles in the Bonin Islands (Coleoptera: Cerambycidae). Rep. Fac. Sci. Shizuoka Univ., 8: 117-135.  
———, 1983. アカハナカミキリとヒメスギカミキリの新産地. 昆虫と自然, 18(3): 47.  
横原 寛, 1988. 小笠原諸島のカミキリムシ相. 小笠原研究年報, 11: 17-31.  
清水善和, 1985. 父島におけるリュウキュウマツの一斉枯死とその後の林相の変化. 小笠原研究年報, 8: 29-43.  
(石川県林業試験場, 江崎功二郎; 森林総合研究所東北支所, 横原 寛)

### ○ウメヤルリミズギワゴミムシを岐阜県で採集

ウメヤルリミズギワゴミムシ *Bembidion umeyai* HABU は, 1959 年北海道定山溪を基産地として記載された小型で, 青色の光沢を持つ美しいミズギワゴミムシである。比較的珍しい種で記載以後, 青森 (下山ほか, 1989; 福田ほか, 1992), 秋田 (笠原, 1985), 岩手 (佐竹ほか, 1985), 山形 (森田, 1993) で発見された。以上のように北日本から僅かながら記録されているが, 筆者は岐阜県で本種を採集したので報告する。

1♂, 岐阜県大野郡朝日村秋神温泉, 11. VII. 1987, 穂積俊文採集・森田誠司保管。

灯火採集であり, 宿の横の秋神川原に生息してい

ると思われる。森田氏の御教示によると, キアシルリミズギワゴミムシ *B. trajectum* NETOLITZKY と比較して羽生氏は記載しているが, 類縁関係は近いものではなさそうである。いずれにしても, この点の解明にはより多くの♂の標本が必要であり, 今後も採集を試みたいと思う。

同定の労を賜り, 種々御教示下さった森田誠司氏にお礼を申し上げる。



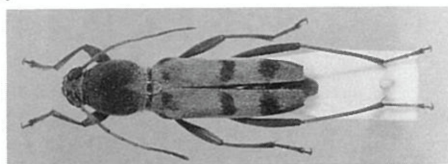
引用文献

- 福田 彰ほか, 1992. 白神山地自然調査概要 (12). 青森県立郷土館調査研究年報, (16): 21-36.  
HABU, A., 1959. One new species of *Bembidion* from Hokkaido. *Kontyû, Tokyo*, 27: 257-259.  
笠原須磨生, 1985. 秋田県のゴミムシ類. 秋田自然史研究会, 秋田.  
MORITA, S., 1993. Notes on the Bembidiinae (Carabidae) of Japan. V. Record of three species from Yamagata Prefecture. *Elytra, Tokyo*, 21: 322.  
佐竹邦彦・笠原須磨生, 1985. 岩手県のゴミムシ類. 岩手県立博物館研究報告, (3): 169-194.  
下山健作ほか, 1989. 赤石川流域自然調査概要 (3). 青森県立郷土館調査研究年報, (13): 16-41.

(愛知県小牧市, 穂積俊文)

### ○岡山県初記録のフタオビミドリトラカミキリ

フタオビミドリトラカミキリ *Chlorophorus muscosus* (BATES) は, 海流により分布を拡大した好例として知られている。日本産カミキリ大図鑑によれば, 兵庫県以西において岡山県のみが空白である。



筆者は岡山県真庭郡川上村明連谷にて 1989 年 6 月 25 日に採木したヒメヤシャブシ *Alnus pendula* MATSUM. の半枯れ枝より同年 7 月 10 日に本種の 1 ♀が羽脱したのを観察した。やや古い記録であるが報告しておく。(岡山県岡山市, 黒田祐一)

### ○スゲハムシ成虫の遅い採集例

スゲハムシ *Plateumaris sericea* (LINNÉ) は, カサスゲの自生する湿地に初夏普通に見られる種であ

る。本種は8~9月では極端に少なくなり、高山や寒冷地で生き残りの個体が見られる程度であるのが普通である。しかし筆者は10月後半に、本種を多数野外で観察しているので、報告しておきたい。

4頭、岐阜県上宝村安房平(標高1,600m), 17. X. 1993, 鎌倉採集保管, 目撃多数。

当地は、北アルプスを越える峠道から見おろせる、窪地に形成された湿原である。周辺の樹木はまだ紅葉していたが、湿地中のスゲ類の葉は完全に枯死していた。本種はこうした枯葉の上で静止しており、他のネクイハムシ類は発見できなかった。1993年は冷夏といわれた年で、昆虫の発生も全般に遅れていた。筆者は当地にはこの日しか訪れていないので、これが生き残りの個体なのか、何らかの理由で誤って羽化脱出したものなのかは、不明である。なお高橋(1989)は、当地の6月22日の採集例を記録している。

参考文献

高橋和弘, 1989. ネクイハムシ再検討のための一資料. 甲虫ニュース, (87/88): 8.

(山梨県韭崎市, 鎌倉正人)

○オオバヤシチビシデムシ岡山県に産す

オオバヤシチビシデムシ *Catops Ohbayashii* JEANNEL は1954年に岐阜県美山町の九合洞を模式産地として記載された洞窟性のチビシデムシであるが、これまでに滋賀県以西からは記録されていなかった。筆者は本種を岡山県内の鍾乳洞より得たので新産地として記録しておく。

2♂♂, 岡山県北房町備中鍾乳穴, 20. VII. 1992, 筆者採集(写真); 5♂♂, 2♀♀, 岡山県新見市羅生門, 29. XI. 1993, 筆者採集; 5頭, 岡山県新見市柏(通称: 上の穴), 29. XI. 1993, 筆者採集。

上記の標本のうち、備中鍾乳穴の1個体は洞の入り口で採集したものであるが、ほかはすべて洞内で採集したものである。羅生門で発見した個体はすべてサワガニの死骸近くにいたものである。上の穴で得られた個体はすべて冬虫夏草のようなものに冒された死骸であった。



なお、上記の標本は林 靖彦氏と倉敷市立自然史博物館のコレクションに収めてある。

末筆ではあるが、今回の発表に関していろいろとご指導くださった川西市の林 靖彦氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

市橋 甫・天春明吉・清水 実, 1984. 鈴鹿山脈北部石灰岩地域内の石灰洞及び鉾山跡洞穴に生息する節足動物. 鈴鹿山脈北部石灰岩地域自然科学調査報告書, pp.

209-273. 藤原岳自然科学館。

JEANNEL, R., 1954. Un *Catops* nouveau du Japon. *Rev. Fr. d'Ent.*, 21: 40-41.

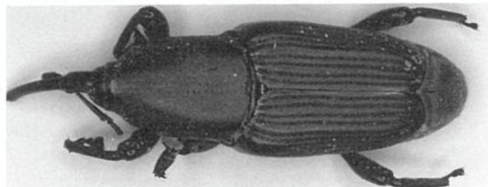
(倉敷市立自然史博物館, 奥島雄一)

○バナナツヤオサゾウムシ徳之島に産す

徳之島産のバナナツヤオサゾウムシ *Odoiporus longicollis* (OLIVIER) を所有しているので報告する。

1頭, 鹿児島県大島郡天城町三京, 10. VI. 1986, 池田征夫採集。

本種の産地として『原色日本甲虫図鑑』(1985)に



は、琉球(沖縄); 中国・東南アジアとなっている。

標本を恵与してくださった池田征夫氏にお礼を申し上げます。(兵庫県西宮市, 田中 稔)

○エゾヒメゲンゴロウ青森県恐山に産す

エゾヒメゲンゴロウ *Rhantus yessoensis* SHARP は、森・北山(1993)によれば、本州における記録は少なく、宮城・東京・静岡・富山の4県から知られているにすぎない。やや古い記録であるが、筆者は本種を青森県で採集しているので報告しておきたい。

1頭, 青森県大畑町恐山あすなろライン, 15. VIII. 1991, 鎌倉正人採集。

道路脇の水たまりで得た。近くの林内には湿地があったが、オオヨモギハムシの分布調査中で、水生昆虫には時間をかけることができなかった。なお、北海道昆虫同好会誌 *Jezoensis* 19号の表紙を飾っているのは、この標本である。

標本は森 正人氏が保管している。

参考文献

森 正人・北山 昭, 1993. 日本のゲンゴロウ, 156-157, 162-163. 文一総合出版, 東京。

(山梨県韭崎市, 鎌倉正人)

○ヤツボシカギバラヒゲナガゾウムシの採集例

ヤツボシカギバラヒゲナガゾウムシ *Deropygus histrio* SHARP は日本産昆虫総目録によると北海道からの記録が無いようであるが、筆者らは以下のように採集しているので報告しておく。

1頭, 北海道紋別市大山, 26-27. VI. 1992, 宮下・杉本採集。

この個体は大山展望台付近において叩き網で得られたものである。

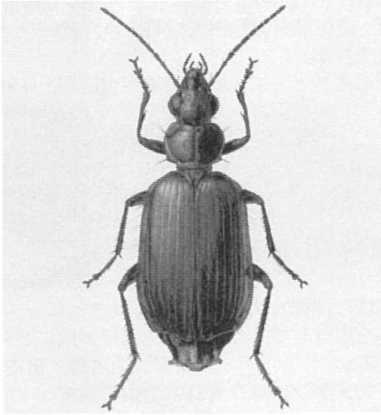
(北海道江別市, 宮下公範; 札幌市, 杉本 肇)

○コルリアトキリゴミムシ埼玉県の採集例

コルリアトキリゴミムシ *Lebia viridis* SAY は北米原産の移入種として知られ、すでに千葉県・神奈川県・東京都・群馬県・茨城県など関東各地から報告があるが、以下のように埼玉県からも採集されて

いるので記録しておきたい。標本をお寄せいただいた内田正吉氏に深謝申し上げる。

1頭, 大里郡寄居町桜沢字中小前田, 20. X. 1991, 内田正吉採集 (水田の地表); 2頭, 秩父市久那, 17. V. 1993, 内田正吉採集 (灯火); 1頭, 秩父郡大滝村川又, 21. VIII. 1993, 筆者採集 (灯火)。



参考文献

- 平野幸彦, 1990. 月刊むし, (237): 34.  
 岩瀬和夫, 1990. 月刊むし, (238): 14.  
 笠原須磨生・西山 明, 1990. るりぼし, (15): 54.  
 中根猛彦, 1989. 昆虫と自然, 24(8): 33.

(埼玉県富士見市, 小田 博)

○クシヒゲツツシンクイ (♂) の採集例

筆者は一般的に採集しにくいとされるクシヒゲツツシンクイ *Hylecoetus flavellicornis* (SCHNEIDER) の雄を採集したので報告したい。

5♂♂, 北海道勇払郡占冠村本流, 9. VI. 1993.

採集地周囲の樹相は, ヤナギ, シラカバ, イタヤカエデ等の広葉樹二次林が支那的であったが, 林道脇にはトマツ材が堆積されており, 最初の1頭はトマツ材の切り口に静止していた。残りの4頭は多数の雌とともに周囲を飛翔していたものを採集した。飛翔も非常にゆるやかな上, 特異な触角の形状から, 飛翔中でも容易に雌とは識別できる。

なお, その日は晴天で6月上旬としては気温も上昇していた。

参考文献

- 黒沢良彦ほか, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (III). 保育社。

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社



(北海道河西郡, 伊藤勝彦)

○シモヤマミズギワゴミムシ岩手県の記録

シモヤマミズギワゴミムシ *Bembidion shimoyamai* HABU は, 岩手県で既に1例の報告 (佐竹・笠原, 1985\*) があるが, 珍しい種のようなので筆者の採集例を追加記録しておく。

1頭, 岩手県水沢市胆沢町北沢, 25. VII. 1992.

ベイトトラップにて採集。本種は通常は明るい青の光沢が強いが, 本個体はやや緑がかった色調をもっている (笠原須磨生氏保管)。

末筆ながら, 同定及びいろいろとご教示頂いた笠原須磨生氏に厚くお礼申しあげる。

\*佐竹邦彦・笠原須磨生, 1985. 岩手県立博物館研究報告, (3): 176.

(神奈川県川崎市, 高崎鉄也)

◇105号の訂正◇

p. 3 左段下から13行目 (誤) 本種幼虫→ (正) 本種成虫; p. 3 右段下から8行目 (誤) ヒメクロオサムシ→ (正) ホソヒメクロオサムシ。

日本鞘翅学会

会費 (一カ年) 5,000円, 次号は1994年9月下旬発行予定

発行人 渡辺泰明

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館昆虫第1研究室

電話 (3364) 2311, 振替 00180-3-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥7,000, 桐合板製インロー型標本箱大 ¥2,500, 送料一箱につき都内及第一地帯: 4個以下 ¥1,600, 5個以上 ¥1,000 (以下同様), 第2地帯 ¥1,800, ¥1,100, 第3地帯 ¥2,000, ¥1,250, 其他, 各種器具, 針などを製作販売。カタログを御請求下さい。(¥62)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 3811-4547, 振替 00160-7-113479